



特定非営利法人 (NPO 法人)

# セルフメディケーション推進協議会会報

SMAC Self-medication advocacy council

2010年3月1日 No. 17

## 特集

### 第7回日本セルフメディケーション学会・交流会 開催報告 セルフメディケーションを科学する

～OTC医薬品から健康食品まで～

開催日：2009年10月17日(土)～18日(日)

会場：慶應義塾大学薬学部芝共立キャンパス

平成21年度のSMAC学会・交流会が秋葉保次年次会長ののもと、昨秋開催された。2年振りに東京に戻り、慶応大学薬学部芝共立キャンパスでの開催であったが、150余名の参加者を集め盛会裡に終了した。

以下、学会内容の一部を紹介する。

#### シンポジウム (第1日目午後)

#### 「販売制度改正とOTC医薬品販売をめぐる問題」

学会第1日(10月17日)のシンポジウムは、昨年6月から施行された改正薬事法による一般用医薬品の販売制度改正に伴う問題点とそれらの解決に向けての方策を話し合う目的で「販売制度改正とOTC医薬品をめぐる問題」と題して行われた。シンポジストに、製薬企業の立場から西沢元仁先生(日本OTC医薬品協会常任理事)、薬局の立場から生出(おいで) 泉太郎先生(社団法人日本薬剤師会副会長)、消費者の立場から棚橋節子先生(社団法人日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会常任理事)をお迎えしてご講演いただいた。

製薬会社の立場で講演された西沢先生は、まず今回の薬事法改正のポイントがOTC薬の製造者・販売者、それを使用する生活者がともに生命関連商品である医薬品のリスクを管理し、その有効性を発揮させようという点にあったことを示された。次に、一般用医薬品が3つに区分され、その区分に応じた専門家の関与が法的に明示されたこと、これによりOTC薬販売者による生活者へのセルフメディケーション支援の仕組みを明らかにしたこと、などを話された。また、製薬企業の観点からは上記のようにOTC薬を適正に使用する仕組みが整ったことにより、より効果の優れたスイッチOTC薬、従来はなかった効能をもつスイッチOTC薬が市場に登場する可能性が出てきたことを指摘された。一方、薬剤師の適

切な関与により、第1類医薬品が単に「一番効果のあるOTC薬」、「一番危険なOTC薬」といったとらえ方をされないこと、新たなスイッチOTC薬登場のためには、薬局薬剤師の適切な指導の下でスイッチOTC薬が適切に使用されることにより其の効果が発揮される実績を積み上げられること、これによりスイッチOTCが市場に出てくる環境や体制の整備が整うことが重要であるとの見解を示され、OTC薬、とくに第1類医薬品のスイッチOTC薬の販売における薬局薬剤師の役割の重要性を強調された。

薬局の立場で講演された生出先生は、薬事法改正に至った経緯を話された後、「日本薬剤師会セルフメディケーション・サポート薬局」に対するアンケート調査結果を示された。その結果これらの薬局では、消費者への説明、情報提供の取り組みが進んでいる、薬剤師職能を生かせる第1類医薬品への関心が高まって、それが品揃え、売上にも現れている、指定第2類医薬品も第1類と同様に扱おうとする薬局も見られる、受診勧奨などの「トリアージ」は薬剤師の重要な役割であるとの認識が強い、などの点を紹介された。さらに、処方調剤に対する「調剤指針」に相当するものが、OTC薬販売については存在しないことを指摘され、日本薬剤師会の「一般用医薬品販売の手引き」とともに、販売者責任シールの普及、副作用被害者救済制度の周知などの日本薬剤師会の取り組みを紹介された。今後の薬局は調剤専門を脱し、処方調剤とともにOTC薬の販売も含めた地域の医療提供施設であることが重要であると強調された。

消費者の立場で講演された棚橋先生は、まず医薬品が本来の機能を発揮するためには情報の提供と医薬品の点検、検証が重要であるとの見解から、医薬品販売における情報提供体制を整備することの重要性を強調された。さらに、登録販売者と薬剤師との連携が不可欠で医薬品

販売に従事する人材育成の重要性を指摘された。今回の医薬品販売制度改正については、OTC薬のリスク分類区分の外箱表示で効果の程度がわかること、最寄りのスーパー、コンビニなどでOTC薬が購入できて便利なこと、価格競争でOTC薬の価格が下がるといった利点をあげられた。一方、効果の強い第1類医薬品が購入しにくくなること、価格競争に伴う種々の不安材料、薬剤師不在などによるOTC薬の情報提供不備などの懸念を示された。さらに、改正薬事法施行に伴って「大衆薬、コンビニ販売開始」、「薬販売、新資格に熱視線」、「医療用医薬品大衆薬へ転用相次ぐ」などのマスコミ報道がされ、改正薬事法の一部のみがセンセーショナルに取り扱われている点や、新規参入した他業種が適切にOTC薬の販売ができるか否か、などの問題点も示された。薬局側の問題としては「かかりつけ薬局」が生活者に浸透していない点などをあげ、薬局薬剤師の努力不足を指摘した上で、この点の改善の重要性を強調された。

三先生の講演後、OTC薬に関する薬剤師と登録販売者と能力向上の必要性、登録販売者と薬剤師の連携などについて活発な討論がされた。

座長 渡辺謹三（東京薬科大学教授）

## 教育講演（第2日目午後）

### 「痛みのセルフメディケーション」

#### はじめに

講演者 宮田満男先生は、セルフメディケーションを概括すると共に、プライマリケアの5の要素から、それを担うのはかかりつけ機能の充実した薬局薬剤師が極めて相応しいとして、かかりつけ機能を拓く3つのKEYを提唱されました。

その1は、生理。解剖学を基礎とするOTC薬の症候学。

その2は、症候学を活かす「聞き取り技術」。

その3は、生活習慣病を中心とするヘルスリテラシーの推進。

この1及び2は、相談者の訴えから何処に問題がどの程度あるか聞き出し、必要があればそれに適したOTC薬を選択する、「症状からの適剤探し」というセルフメディケーションの基本的なサポートであります。

その3は、社会全般の人たちの健康を守るための意識改革を目指すもので、一人一人の相談者に対する健康相談であり、「健康作りのお手伝い」と題されるものであります。

この3つによって、治療的な相談と予防的な相談に対応出来るかかりつけ機能を包括するように思えます。

#### 事例

この概念を整理された上で、相談者がセルフメディケー

ションを選択した場合の基本的な対応の姿勢を、痛みを例示として取り上げました。痛みを例示した意味は、「相談者が「痛み」を訴えれば、そこに「痛み」が存在していることを意味している」と画面に表示されました。この指摘が、セルフメディケーションに対応する上で重要であると思われました。

また、相談者が自覚している痛みの程度を示す尺度として、顔の表情によるフェース・スケールを示されました。

例示された痛みは、内臓痛として腹痛、骨格筋系等の痛みとして腰痛・頸肩腕症候とこむら返りの三通りであります。

腹痛には、問診マニュアルが掲示され、原因により内臓痛・体性痛、関連痛の3分類とし、発生箇所を整理しました。その上で、同じ胸やけでも器質性疾患による場合は、医家に受診を進めるべきであり、機能性疾患によるものはOTC薬で対応が可能な場合もあるとされました。さらに、訴えを膨満感と痛みに分け、それを基にOTC薬の配合成分から区分して、適切な選択と対応を求めました。

骨格筋系の痛みの訴えがあった場合も、同様の手法で解説されました。

最後の痛みの事例は、こむら返りと芍薬甘草湯で、前2例と異なるところは、芍薬甘草等という医薬品を特定した上で、セルフメディケーションへのアプローチでした。これは、適剤探しではなく、芍薬甘草湯が使用できる場合のこむら返りを、相談者の訴えから導き出すことの手法であります。

#### おわりに

宮田先生の今回の講演は、セルフメディケーションをサポートする人たち、特に薬剤師にとっては、正しく教育的な講演でありました。セルフメディケーションの概念が、治療だけでなく予防相談の含む分野にまでの広がりを持つべきことを講演されました。聴講者はこれにより、基本概念から現場での対応に至るまで一貫した思想の中で、行動し対応できることになりましょう。1時間30分が短く思える充実した内容でありました。多くの適切な図版がありましたが、省略させていただきました。

宮田先生のこれからの活躍を期待して座長報告といたします。

座長 秋葉 保次（秋葉薬局）

## さらなるセルフメディケーションの推進に向けて ～第13回理事会・新春役員懇親会 開催さる

開催日：2010年2月1日(月) 10:00～14:00

会場：新宿・京王プラザホテル

昨年10月に開催された第7回日本セルフメディケーション学会の開催報告と今年10月に大阪薬科大学を会場として開催予定の第8回学会の準備状況報告、厚生労働省・山本薬事企画官を迎えて開催された意見交換会開催報告と、平成22年度の事業方針や次期役員人事等の審議を主議題とした第13回理事会及び新春役員懇親会が去る2月1日、新宿の京王プラザホテルで開催された。

池田会長を議長として午前中に行われた理事会では、森陽学会担当理事から、昨年10月17、18日に慶應義塾大学薬学部芝共立キャンパスにおいて開催された第7回学会(秋葉保次年会長)について、150人余の参加者を得て成功裡に終了した旨、報告があった。また、本年10月23日(土)、24日(日)の両日、再び開催地を東京以外に移して行われる予定の第8回学会について、実行委員長の恩田光子大阪薬科大学准教授と当面の折衝に当たっている村田専務理事から、準備状況に関して報告がなされた。

さらに、ホームページについて、三角理事から、主として一般を対象とした「セルフメディケーションネット」と、セルフメディケーションに携わる専門家を対象とした「セルフメディケーションPro」に関する進捗状況が報告され、新しいシリーズのスタートの提案が承認された。また、菅野理事とともに制作された健康運動DVDの紹介があった。

報告事項の最後には、昨年7月、厚生労働省の関野秀人薬事企画官の後任として就任された山本史氏を迎えて、1月29日に開催された意見交換会の開催報告が佐藤理事から行われた。(要旨・別掲)

次に、審議事項に関して、まず、平成22年度の事業方針について、村田専務理事から「新年度は、国民のセルフメディケーションに対する意識調査の実施など検討案件がいくつかあるが、予算と照らし合わせて検討し、6月11日開催予定の総会で発表する方針。」との提案がなされ、審議の結果、承認された。また、次期役員人事について、池田会長から「栄養・介護・看護の領域からも理事を迎えたい。とはいえ現在の役員を実績に応じて判断



森先生叙勲祝い



第13回理事会

し、役員数のスリム化が望まれる。また、会長を含めた役員若返りを視野に運営企画会議での検討を願いたい。」との提案がなされ、検討は運営企画会議に託された。この他、安田俊道会長補佐から会員動向・予算の執行状況等の報告があった。

引続き午後からは、新春役員懇親会が会費制で開催された。この場では、まず昨秋の叙勲で、瑞宝・中綬章を授章された森陽先生に対するお祝いの花束贈呈と記念撮影が行われた。次いで、池田会長をはじめ全出席者から今後のSMAC活動への抱負・要望等に関するショート・スピーチが行われた。

# 厚労省・山本史薬事企画官を迎えて意見交換会開催さる

開催日：2010年1月29日(金) 13:30~15:00

会場：霞が関・(財)商工会館 7階会議室

SMACでは、セルフメディケーション時代の本格的な到来に当たって、この度、行政・生活者・産業界・団体等セルフメディケーションの展開に携わる多方面の指導者とSMAC幹部との意見交換会をシリーズで開催することを計画、その第1回として、セルフメディケーションの推進行政に深く関わる薬事企画官のポストに前任の関野秀人氏の後任者として、昨年7月に着任された山本史(やまもとふみ)氏との意見交換会が開催された。

## 1. 出席者：

厚労省側 山本企画官、高江慎一医薬食品局総務課課長補佐

SMAC側 池田会長以下、20名

## 2. 議事次第

①開会、②池田会長挨拶、③山本企画官経歴紹介、④レクチャー「当面する薬事行政の課題」、⑤質疑応答、⑥村田専務理事謝辞、⑦閉会

## 3. ポイント

### <山本企画官レクチャー>

○医薬品医療機器総合機構の業務調整課長をしていたことがあるが、「健康被害救済制度」の認知度調査をやると、極めて低い。OTC利用によるセルフメディケーションを推進するためには、SMACのような組織と手を携えて薬事行政の広報にもっと努める必要がある。

○自分の健康は自分で守れ!と言いつつ、守り方を国民に教えていない。文科省・公教育の協力を得ながら一般の普及啓発に努める必要がある。

○総合スーパー、コンビニエンスストア、家電量販店等、OTCの取扱いが拡大し、消費者のアクセスのチャンスが広がることは基本的に良いこと。ただ、医薬品を扱えばすぐに利益が上がるような単純なビジネスではない。改正薬事法施行半年強を経過して、事業者の皆様は、ビジネスモデルを手探りされている最中ではないか。試行錯誤の末、次第にフォーマットが固まってくるのではないかと考えている。

○薬事法改正の本質は「OTC薬販売時点における情報提供」。厚労省の監視指導のポイントも自ずからその点に集約される。

○本年度に引き続き、来年度も覆面調査(4000店舗)を

行う。

### <SMAC側からの質問・要望>

○地域の「個店」は当番薬局制度等により、薬局の社会的使命を死守している地域も多いが、新たにOTC販売に取組む流通業などは、そのような意識が薄い。1類が安心して販売できるような体制、バカを見ない体制づくりに心掛けて頂きたい。

○登録販売者試験に合格したからといって、直ちにOTC販売の専門家になれたわけではない。新制度を実のあるものにできるかどうかは今後の運用次第ではないか。薬剤師教育の体制も一層の強化が必要。

○大手流通業の中には、「売場面積30㎡、年中無休、1日12~13時間営業を登録販売者3人で運営」などという計画を発表しているところがある。その場合、現実的には登録販売者7人が必要と考えるが、今後OTC販売の窓口が著増した場合、県薬務課の監視指導体制はついていけるのか。

(文責・編集部)

## SMAC幹部、厚労省・岸田修一大臣官 房審議官を表敬訪問

SMAC幹部は2月18日(木)午後、厚生労働省の薬事行政のトップである岸田修一・大臣官房審議官(医薬担当)を表敬訪問した。一行は池田会長をはじめ、村田専務理事、安田会長補佐、佐藤広報担当理事の4人で、この度の表敬訪問は、岸田審議官と同窓の安田会長補佐の申入れにより実現したもの。

当日は、まず池田会長からSMACの設立趣旨と活動概要が紹介された。岸田審議官からはセルフメディケーションの定義、SMAC活動に対する社会的な関心についての質問がなされ、村田専務理事が所見を述べるとともに、それらのエビデンスを得るためにもセルフメディケーションに関する国民の意識・意向調査の実施が必要との提案がなされた。

40分弱の訪問の後、岸田審議官からは改めてSMAC活動への激励が寄せられた。

発行：特定非営利活動法人(NPO法人)セルフメディケーション推進協議会

事務局：〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11第7東洋海事ビル8階

(株) 創新社内 Tel.03-5521-0890 Fax.03-5521-2883

<http://www.self-medication.ne.jp> E-mail:smac@self-medication.ne.jp